

（別紙2）薬学部薬学科の具体的な履修の展開

1. 専門教育で培った知識と技能を応用し、実践力を身につける実務実習教育

1 番目のディグリー・ポリシー「課題を理解し、自ら進んで解決に挑む実践力」を培うために、基礎・応用科目を基盤とする臨床系科目と実践能力を培う実務実習を提供します。

【概要】

1 年次から 3 年次で学ぶ基礎・応用科目（物理・化学・生物系および衛生系、薬理・薬剤系）で身に付けた知識を発展的に活用する臨床系科目と実務実習科目を 1 年次から 5 年次で順次履修します。1 年次には、多職種連携と人体解剖学を履修することで、臨床で必要とされる技能についての理解を深めるとともに、薬剤師としてのプロフェッショナリズムや患者を見る姿勢を学びます。人体解剖学では、実際の人体の構造を観察し、解剖学・生理学に関する個別の知識の有機的統合をはかります。2 年次には、臨床治療学概論において臨床的病態の基礎知識を学びます。3 年次には、多職種連携と薬物治療学を履修します。薬物治療学においては、将来薬剤師業務や創薬研究などを進めるにあたって知っておくべき臨床症状の成り立ちと臨床医学的な思考方法を学び、それらに基づいた薬剤の選択や薬剤の開発要素を学びます。4 年次には、臨床準備教育、臨床医薬品治療学、薬事法規・薬事行政を学び、薬剤師業務で必要となる実践的な知識を学びます。5 年次では、病院・薬局実務実習に参加し、薬剤師に必要な技能と態度を学びます。これらの臨床系科目・実務実習科目を学ぶことで、基礎・応用科目で身につけた知識が薬物治療の実践的な力として身に付きます。

とくに多職種連携科目においては、医学部（医学科、保健学科）、歯学部と連携して、現代の医療で欠かせないチーム医療の基礎知識、必要な技能を習得します。

【評価】

講義科目においては、定期試験やレポートにより、必要な知識が身についたかを評価します。定期試験においては、表層的な知識だけでなく、それぞれの科目が目指す概念的理解が得られているかについて、論述テスト（パフォーマンス課題）による評価に努めます。実習科目においては、授業態度、実習後の発表などにより、技能が身についているかを評価します。4 年次までに習得した知識・技能は、薬学共用試験（CBT・OSCE）で評価します。

2. 多様な問題を見出し、解決する能力を養うための薬学研究教育

2 番目のディグリー・ポリシー「課題を自ら見出し、解決策を考案できる探究力」を培うために、合目的に広範な情報を収集し、的確に分析・精選した情報を活用できる演習・実習関連科目、未知の課題に取り組む卒業研究を提供します。

【概要】

1 年次と 2 年次には、薬学研究入門を受講することができます。薬学研究入門では、最先端の研究にふれることで、研究に対する理解を深め、未知の課題を考え、未知の科学的課題に挑戦する機会を得ることができます。3 年次には、薬学基本実習、物理系基礎実習、化学系基礎実習、生物系基礎実習、衛生系基礎実習、医療系基礎実習を受講することで、各分野における未知の課題に対する科学的アプローチの仕方、ならびに実験手技を学びます。4 年次には卒業研究基礎実習、5 年次と 6 年次には卒業研究実習を受講します。これらの研究実習においては、学生は研究室に所属し、未知の研究テーマを設定し、研究を推進します。卒

業研究実習の研究成果は、卒業研究発表会にて発表し、薬学部の教員から質問を受けます。

【評価】

実習科目においては、授業態度、実習後の発表、実習後のレポートなどにより、技能と態度が身についているかを評価します。また、卒業研究実習については、指導教員からの実習中の技能や態度の評価だけではなく、卒業研究発表会において研究成果の新規性と重要性、ならびにプレゼンテーションと質疑応答について指導教員以外の教員から評価されます。

3. 共感的態度を培い、他者との関わり方を学ぶコミュニケーション教育

3 番目のディグリー・ポリシー「共有・議論できるコミュニケーション力」を育成するために、共感的態度やコミュニケーション能力を培う早期体験科目と言語教育科目、及びこれらを礎に他者との関わり方を学ぶ実習関連科目、研究成果の議論の仕方を学ぶ卒業研究を提供します。

【概要】

1 年次と 2 年次には、SGD 入門と早期体験学習において、数人のグループに分かれ、スモールグループディスカッションを学びます。SGD 入門においては社会全般の話題について、早期体験学習においては薬剤師業務に関連した問題について、ディスカッションをおこなうことにより、薬剤師や関連分野におけるコミュニケーション能力を高めます。3 年次には、薬剤師倫理学において倫理に関連したスモールグループディスカッションをおこない、倫理的問題の把握と倫理に関連した他者への関わり方を学びます。薬剤師、その他の職務における英語でのコミュニケーションができるように、1 年次から 6 年次にかけて、継続して英語を学びます。3 年次以降においては、薬学分野の専門英語を学ぶことで専門分野における英語コミュニケーションの上達をめざします。実務実習においては、薬剤師業務に関連したコミュニケーション、卒業研究実習では研究に関連したコミュニケーションを学びます。

【評価】

スモールグループディスカッションの科目においては、授業態度、実習中の発表やコミュニケーション、実習後のレポートなどにより、技能と態度が身についているかを評価します。また、英語科目においては、期末テストにおけるライティングとリスニングの評価をおこないます。実務実習と卒業研究実習においては、実習中の態度、実習後の発表、実習後のレポートなどにより、技能と態度が身についているかを評価します。

4. 薬学を自然科学の一分野として理解し、科学的素養を身につける薬学基礎教育

4 番目のディグリー・ポリシー「薬学に関する基礎的かつ体系的な専門力」を修得するために、物理・化学・生物系の基礎科目と実習関連科目、基礎科目に関連付けた衛生系、薬理・薬剤系の応用科目と実習関連科目を提供します。

【概要】

1 年次には、基礎化学、基礎物理学、基礎生物学を学ぶことで、薬学分野で必要とされる高校理科の知識の復習と定着を図ります。これらの科目の履修後、1 年次から 2 年次にかけて、有機化学、物理化学、生物化学、分析科学、天然物化学など、物理・化学・生物系の基礎科目を履修します。2 年次から 3 年次にかけては、免疫学、薬理学、衛生化学、微生物学、

薬剤学など、基礎科目に関連付けた応用科目を学びます。また、これらの講義を履修後の3年次には、薬学基本実習、物理系基礎実習、化学系基礎実習、生物系基礎実習、衛生系基礎実習、医療系基礎実習を受講することで、それぞれの分野における実験手技と未知問題に対するアプローチの仕方を学びます。これらの基礎科目、応用科目、実習関連科目で身につける知識と技能は、1の臨床系科目と実務実習の土台となり、専門知識に基づいた実践能力を身につける上で役立ちます。

【評価】

講義科目においては、定期試験やレポートにより、必要な知識が身についたかを評価します。定期試験においては、表層的な知識だけでなく、それぞれの科目が目指す概念的理解が得られているかについて、論述テスト（パフォーマンス課題）による評価に努めます。実習科目においては、授業態度、実習後の発表などにより、技能が身についているかを評価します。

5. 豊かな人間性、主体性、思考力・表現力を身につけるための教養教育

5番目のディグリー・ポリシー「好奇心を持ち、生涯にわたり学び続けることができる教養力」を涵養するために、全学共通科目や全学交流科目を提供します。

【概要】

1年次、2年次には、全学共通科目において、課題探究、情報・数理データサイエンス、健康・スポーツ科学、市民性と異文化理解を受講し、幅広い教養と多様な分野に対する好奇心を高めます。課題探究では、課題を見出し、課題解決に挑む姿勢と能力を獲得することを目指しています。情報・数理データサイエンスでは、社会人として必須である情報リテラシー、ICT活用能力、データ活用能力を習得します。健康・スポーツ科学では、生涯にわたって学び続ける際に必須となる健康づくりを学び、スポーツを通じて課題解決能力を養います。市民性と異文化理解においては、多様な価値観と多様な文化的背景の人々で構成される現代社会のあり方を学びます。全学交流科目においては、岡山大学全学部の教員が社会系、生命系、自然系に分かれて先端研究について講義します。学生は多様な分野の先端研究に触れることで、深い教養と探究心を身につけます。また、1年次と2年次のSGD入門と早期体験学習、その後の多職種連携科目では社会における医療の役割について学びます。

【評価】

講義科目においては、定期試験やレポートにより、必要な知識が身についたかを評価します。課題探究においては、授業態度、実習後の発表などにより、技能や態度が身についているかを評価します。

学修成果の評価

1～5の教育を通じて、ディグリー・ポリシーで掲げた5つの力がどの程度修得できているかについては、年に1回、ルーブリックを用いて学生と教員がそれぞれ評価を行い、必要に応じて履修指導を行います。学年進行に伴って経時的に評価を行うことで、5つの力の修得状況を段階的に把握することができます。